

國學院大學学術情報リポジトリ

『無名草子』に見る、総主形容詞文とその背景

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 幸弘, Nakamura, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000117

『無名草子』に見る、総主形容詞文とその背景

中村幸弘

一 総主文についての認識

改めて思い出すことに努めて、そのうえで確認してみると、それは、「象は体大なり。」（文末の句点は筆者が施したもので、以下、そのように取り扱う）だった。その「象は」について、これを「総主」と呼んだ草野清民は、当代評判の文典^二、三を見てもこの問題に解き及んでいないものとして、この主語は帝国の語法に特有の「総主」である、といっている。^{（一）}そこには、「熊は力強し。」や「仁者は命長し。」などの用例も引かれ

ていたが、その後、三上章が『現代語法序説』などにおいて「象は鼻が長い。」文として取り上げたところから、総主文というとその用例は「象は鼻が長い。」文に定着して現在に至っている。^{（二）}いま、以下に、その三上章が『国語学辞典』（東京堂出版・昭和三十年）において担当執筆した「主語」の項の一部を引いてみることにする。

【題目語】草野清民以来、総主語（略して総主）の問題がしばらく文法界をにぎわした。「象は（大主語）鼻が（小主語）長い（述語）。」という主語の重なるの、下の小主語

に対して上の大主語を総主語と呼んだのであった。この名称はむしろ不適当であって、題目語「何々は」の下に部分的な主格（部分主格）「何々が」が現われるというだけのことである。題目語として普通な場合である。「何々が」と「何々は」の区別を不問に付しておいて、「何々は」だけを三つに分けようとあせつたのは事の順序をまちがえたものであったが、最近ようやく提題の主語、主題、題目語などの用語で「何々は」（また「何々も」）を統一的に扱う傾向が起った。

この文構造の一文は、「猿は尻が赤い。」でも何でもよいはずなのに、その後、もっぱら「象は鼻が長い。」文として取り上げられつづけて現在に至っている。その用例文「象は鼻が長い。」文が直接しているかどうかまでは認識できていないが、とにかく、その文構造を担うハとガとに現代語文法界の耳目は集められることとなる。『日本の言語学（第三巻 文法Ⅰ）』は、そこが見えてきそうで見えてこない編集である。⁽³⁾（総主・提題・「は」と「が」は、草野清民に始まる併せて九編の論考を集録してくれてあるが、そこに三上章の論考を見ることはできない。その解説を担当する大野晋は、大正・昭和戦中期までにハ・ガの

諸論は多いとしてか、三上章については、次の一文をもって紹介するだけであった。

なおこの問題については、戦後に三上章が力を注ぎ、「主語抹殺論」を提起して『象は鼻が長い』『日本語の論理』その他でハとガの文構造について述べている。

この文構造の表現は、現代語だから「象は鼻が長い。」となるのであって、古典語だったら「象鼻長し。」だったろうと思えてくる。「象体大なり。」でよかったはずである。それを、草野清民が「象は体大なり。」としたのは、総主末尾のハは古典語にも見られるが、主格のガは古典語には準体法主格の場合以外見られなかったからであろうと見えてきた。そのハも、いっそう古くは表されなかった。あるいは、総主文最古の用例となるかもしれない『土佐日記』の「死じ子、顔よかりき。」（一月四日）は、そのハも伴わない、無助詞の総主文である。

小田勝『実例古典文法総覧』は、第13章「とりたて」に13・9・2・1として総主文を紹介する。「象は鼻が長い。」「死し子顔よかりき。」に続けて、古典語文の用例八例を若干のバリエーションも交えて引いてくれてある。⁽⁴⁾これまでの古典文法書のどこに

も見るこのできなかった新項目である。ただ、碁石雅利氏の拙著『古典文の構造』は、その第三章「複雑な文の構造を整理する」の【二】の①「主題部と補充部をもつ文」としてこの文構造を取り立てていた。冒頭に「驚は、いとみめも見苦し。」（枕・四一）を引いて「キリンは首が長い。」とその構造が共通することから説いていた。『枕草子』『徒然草』に頻出するとも添えてあった。

いま、小稿は、取り立てて報告する機会のないままになっていた、総主文の典型的な文型が『無名草子』に定着していたことを報告しようとするものである。加えて、そこには、総主文が発生する背景も見えてくるのである。

二 『無名草子』に頻用される形容詞文

『無名草子』は、新編日本古典文学全集本（以下、新全集と呼ぶ）『松浦宮物語／無名草子』でそのページ数を確認すると、一七三ページから二八五ページまでの一一一ページ八行である。その文章構成は段落として区切る意識がまったくなく、それでいて、序も終章もそれとわかる表現が配されている。序は、この評論集の筆録者である老尼によって歴史物語の体裁を借り

て述べられる。老尼が最勝光院の門内に入ると持仏堂があり、若い女房たちから語りかけられたので、法華経の末尾を読んで聞かせる。夜も更け、一部の女房は姿を消していたが、残った三・四人が次々に語り始める。捨てがたきふしから始まって、物語の批評、撰集の批評、女性の批評と続いて、終章は男性の批評と天皇のお話は『世継』『大鏡』に譲るとして、終わるともなく終わっている。そこには二四五語のコソが用いられているが、そのうちの一二四語のコソが、時枝誠記が対象語と呼んだ主語に付いていて、形容詞の已然形かそれに準じる形容詞などの已然形で結ばれている。対象語に付くコソ係結形容詞文である。そのうちの二十文が上に総主語相当の文の成分が存在する確かな総主文であり、さらに表面的には単なる対象語に付くコソ係結形容詞文に見えて実は背景に総主語の見えてくる総主文と読み取れる隠れ総主文も存在したのである。

『無名草子』には、そのように対象語に付いたコソ係結形容詞文が一二四文存在する。それに対して、提題主語に付いたコソ係結名詞文が十文存在し、動作主主語に付くコソ係結動詞文が十二文存在する。対象語に付くコソ係結形容詞文の異常な多さについては、その『無名草子』が文芸批評論集であるからと解してよいであろう。

文部省『中等文法』は、形容詞について、自立語や活用する用言の一つで言い切りが「し」となるなど、確かに形態面を認識させる姿勢であった。^⑧ただ、その『中等文法 口語』には、次のような問題が配されていた。『中等文法』にも、次のような問題があった、といったのである。

問題 4 動詞・形容詞・形容動詞はそれぞれ形が違うが、

意味の上で、動詞と形容詞とはどう違うか。動詞と形容動詞とはどう違うか。

形容詞と動詞との違いは、その後、折口信夫「わかしとおゆ」とからも学ぶこととなった。^⑨それは、「貧し」と「富む」とについて考える契機となり、やがて、「なし」と「あり」とに悩まされる原点ともなった。岩波講座『日本語 6 文法 I』において、「用言」としてその項を担当した川端善明は、その二と三とにおいて、述定述語としての形容詞と装定述語としての形容詞とに分けて形容詞を認識させてくれた。^⑩そして、川端善明の、その四においては、それら形容詞とは異なる動詞について論じている。『無名草子』の形容詞は、対象語に付くコソ係結形容詞文のそれであった。述定述語としての形容詞である。

『無名草子』は、あの女房たちが次々と語って展開していく文芸批評論集である。その批評の発言は、述定述語としての形容詞をもって表現されていた。そこには、対象語が必須で、形容詞文が成立していた。語り初めには、その語りが何を背景にするものか、作品名や登場人物など、あらかじめ文頭に配されることとなった。長い語りには、段落冒頭文にも、それが求められた。総主語の登場だった。『無名草子』の総主文は、そのような総主形容詞文だったのである。

三 総主語と対象語とから成る総主形容詞文

— 動物名とその身体部位名となど、属性概念の広狭か —

草野清民は「国語ノ特有セル語法―総主」論文において「象は体大なり。」の「象」を指して総主といっているが、現代の吾人の認識としては、その「象」は「象は」でなければならぬ。そこに引かれる総主文を見たとき、そこには総主動詞文・総主形容詞文・総主形容動詞文が認識される。「鳥獸虫魚皆性あり。」「酒は養生に害あり。」が、その総主動詞文であり、その論文の中ほど以降に現れる「立田川はもみぢ葉流る」もそう

である。そこで、その代表用例の「象は体大なり。」は総主形容詞文だったことになるが、それは形態が異なるだけであって、いわゆる主語が対象格である点などからも、形容詞文として取り扱ってよいことになる。以下に、そこに見る総主形容詞文を拾い上げてみる。

○象は体大なり。

○熊は力強し。

○仁者は命長し。

○売葉は効能薄し。

○欲は限無し。

○支那は人口多し。

次の三上章が引く総主文は、『象は鼻が長い』という著書名ともなった、その総主形容詞文、ただ一文例に限られる。

○象は鼻が長い。

小田勝『^{実例}詳解古典文法総覧』に引かれる文例は十例であるが、(1)の「象は鼻が長い。」は三上章の文例であり、(8)「赤玉は緒さへ光れど…」(記歌謡)／(9)「山里は冬ぞさびしさまざりける」(古今)／(10)「三人侍りしは、大姉は亡くなり候ひにき。」(うつほ)は総主動詞文である。以下に、その総主形容詞文を引いてみる。

○死し子、顔よかりき。(土佐)

○この内供は、鼻長かりけり。(宇治三―七)

○呉竹は葉細く、河竹は葉広し。(徒然二〇〇)

○このこやくしといひける人は、たけなむいと短かりける。
(大和一三八)

○山里は秋こそことにわびしけれ。(古今二一四)

さて、以上に見てきた総主形容詞文には、その総主語と続く主語との間にはどのような関係が見えてくるのであろうか。総主語が空間的な背景をいうかに見えた「支那は人口多し。」については、草野清民自身が「支那には人口多し。」と同一視することを否定しているが、それほどに「支那には」とも読み取れてしまう総主語「支那は」でもある。「山里は秋こそことにわびしけれ」の「山里は」も、「山里にては」と読み取れてこようか。もちろん、他の大方は、総主語と続く主語とに属性概念の共通するところが見えて、そこに概念の広狭の関係が見えてくるようである。

「象は体大なり。」も「象は鼻が長い。」も、象という動物名を背景に置いて、その身体部位名を取り立ててその特徴を形容動詞や形容詞で表現しているといえようか。「呉竹は葉細く、河竹は葉広し。」からは、植物名を背景に置いて枝葉茎根を取り立ててその特徴をいう総主形容詞文と見えてくるようである。総主形容詞文が成立する際の、総主語と続く主語との関係性とか条件とかに、属性概念の共通性を背景にした概念の広狭の差や全体と部分との違いなどが存在するかに見えてきたのである。

○サルは尻が赤い。

○キリンは首が長い。

○ウサギは耳が長い。

○ヒイラギは葉が鋭い。

○ボタンは花卉が大きい。

やがて、恒常的な属性から発展して、その機能や価値を評価する表現ともなっていく。

○チーターは足が速い。

○茶葉は新芽が高い。

ここに見て来た総主語からは、総主語が続く名詞に焦点を絞って対象語としてその述語形容詞でその判断を示した一文とも見えてくる。その一方で、一定の観察の結果が対象語とその

述語形容詞となっていて、その背景が見えてくるよう総主語が要請された一文であったかにも見えてくるのである。

四 『無名草子』の総主ハ・コソ係結形容詞文

筆者は長く、ハ・コソ係結形容詞文について、秘かに独り総主文と認めて現在に至っている。広く知られている文例としては、『徒然草』の「世は、さだめなきこそいみじけれ。」(七)を挙げることができる。その総主語とされる「山里は」が〈山里には〉とも読めるところから、「山里は秋こそことにわびしけれ」(古今・二一四)を総主文としてよいかどうかの判断は躊躇されるが、その「∴は∴こそ形容詞已然形」という文型は、総主文型の典型だった。そのハ・コソ係結形容詞文が、『無名草子』には頻用されていた。

かねてから筆者は、総主語について提題の文の成分と見ている。そこで、総主語の多くが提題のハによって提示されているのである。以下において○印を改めて二重傍線をもって図解する述語形容詞は、必須とする対象語にコソを付けて強調し運用させる文型を定着させていた。提題の文の成分がその文頭に総主語として全体が見えるように登場したのである。

- (1) 中にも、権中納言は、琵琶忍びやかに調べつつ、『從冥入於冥永^{にやみやうふんはくろ}不問^{はな}仏名』と口ずさみたまへるほどこそいみじけれ。(三八〔海人の刈藻〕二四八⑮～二四九②)

『海人の刈藻』の登場人物・権中納言は琵琶を奏でながら法華經の一部を口ずさんでいらつしやるあたりがすばらしい、という総主文と見てよいようである。

- (2) 『有明^{ありあけ}の別れ』『夢語り』『浪路^{なみぢ}の姫君』『浅茅^{あさぢ}が原の内侍』
などは、言葉遣ひなだらかに、耳^{みみ}立たしからず、いとよしと思ひて見もてまかるほどに、いと恐ろしきこともさし交じりて、何事も醒^さむる心地するこそ、いと口惜^{くちを}しけれ」など言へば、(四六〔今の世の物語〕二五七⑫～二五八①)

『有明の別れ』などの四作品は表現がなだらかで読み進めていくうちに恐ろしいことも交じって何となく興醒めするのが残念だ、という総主文と見てよいようである。

- (3) ∴、これは、千部を千部ながら聞きたびにめづらしく、文字^じごとにはじめて聞きつけたらむやうにおぼゆるこそ、あさ

ましくめでたけれ。(七)「捨てがたきふし—法華經」一八七
③～⑤

「これは」の「これ」は法華經を指していて、法華經は聞くたびに新鮮な感じがして一文字ごとに初めて聞いて気づいたことのように思われる点が驚くばかりすばらしい、という総主文と見てよいようである。

(4) …また「されど、さやうのことは、我が世にある限りにて、亡き後までとどまりて、末の世の人の見聞き伝ふることなきこそ、口惜しけれ。(五九)〔女の論—紫式部〕二七六③～⑤

「さやうのこと」は音楽方面のことを指していて、音楽の方面は自分がこの世に生きている間だけのことで死後まで残って後世の人が見聞きして伝えることがないのが残念だ、という総主文と見てよいようである。

(5) これは、いつもめづらしからぬ常磐の蔭にて、有栖川の音より外は人目稀なる御住まひにて、いつもたゆみなくおはしましけむほどこそ、限りなくめでたくおぼえさせたまへ。

(六二)〔女の論—大斎院(選子)〕二八二③～⑥

「これ」は大斎院を指していて、この方はいつも珍しくもない常緑樹の蔭で有栖川の川音以外訪ねてくれる人も稀なお住まいでいつも気を許すことなく過ごしていच्छやつたあたりがこの上なくすばらしく思われなさることだ、という総主文と見てよいようである。

(6) また、「…、同じ心なる友なくて、ただ独り眺むるは、いみじき月の光もいとすさまじく、見るにつけても、恋しきことと多かるこそ、いとわびしけれ。」(二)「捨てがたきふし—月」一八二⑧～⑬

総主語も対象語も準体法から成っていて、気の合った友なく月を眺めるのはすばらしい月の光も興が醒めて人恋しさの多さがつらい、という総主文と見てよいようである。

(7) まして亡き人の書きたるものなど見るは、いみじくあはれに、年月の多く積もりたるも、ただ今筆うち濡らして書きたるやうなるこそ、返す返すめでたけれ。(三)「捨てがたきふ

し―文〕一八三⁽¹⁰⁾～⁽¹³⁾

この総主語も対象語も準体法から成っていて、故人の書いたものなどを見るのはたいそうしみじみとして年月が多く積もっているのになった今筆を濡らして書いたようであるのが本当にすばらしい、という総主文と見てよいようである。

(8) 大納言〔―〕、山へ登りざまに、そのたまといふ童^{わらは}に逢^あひたるほどこそ、いみじくあはれなれ。(三八〔海人の刈藻〕二四九⁽⁵⁾～⁽⁶⁾)

「大納言」については、提題の文の成分と見て「大納言〔は〕、」のハの非表出と解せる一方で、「逢ひたる」の動作主としての主語と見ることもできるが、文頭の登場人物名は大方がその人物評の一文であるところから、前者と解してよいであろう。そう見たとき、大納言は比叡山へ登ろうとした時にそのたまという童と逢ったあたりがすばらしく感動的だ、という総主文ということになる。

以上、作品名や登場人物名や、さらにはその行為などについて、どのあたりがどうであったかなどを述べる文型として、こ

の総主ハ・コソ係結形容詞文が定着していたと見る事ができる。また、(8)のように、そのハが非表出の該当文は、(三九〔末葉の露〕二五一⁽⁹⁾～⁽¹²⁾) (同二五一⁽¹³⁾～二五二⁽¹⁾) (同二五二⁽⁵⁾～⁽⁷⁾) (四二〔宇治の川波〕二五三⁽¹⁴⁾～二五四⁽¹⁾) に四文見ることができた。その三九〔末葉の露〕には三文例も集中していて、あるいはこの語り手女房の一つの傾向かとも思えてくるのである。

五 『無名草子』の、コソなし総主形容詞文

総主文は、その述語が形容詞か形容動詞か、限られた動詞かである。上記の一文も、実は総主文で、その述語は「形容詞か形容動詞か、限られた動詞かである」である。「形容詞か形容動詞か、限られた動詞か」は体言(名詞)に相当し、冒頭のその一文の述語は、名詞に断定の助動詞「だ(＝である)」が付いていることになる。したがって、総主名詞文といってもよいことになるのである。

ただ、実際の用例を見たとき、総主文の述語は形容詞が圧倒的に多く、形容動詞のこともあることになる。そこで、総主語へ続く、いま一つの主語は、時枝誠記のいう対象格と意識され、

便宜的に対象語と呼ぶ文の成分として取り扱ってきたのである。

『無名草子』にあつては、その対象語がコソを伴った用例を極端に多く見せてくれる。前章に見てきたところである。それは、対象語をコソで取り立てて強調する意識をもつて発想した形容詞文が好まれたということでもあつたろうか。それに対して、その対象語にコソを添えるまでもないレベルの場合もあつた。そこから、コソなし総主形容詞文が登場することになる。

(9) 『後撰』は、あまりに神さび^{かみ}すさまじきさまして、凡夫の心〔 〕及びがたくはべり。(四八〔撰集〕二六〇③～③)

『後撰和歌集』は、あまりに古風で興醒めの印象で、われわれ凡夫の大腦が理解できのうございます、と読み取れて、総主語相当文の成分に続く対象語「凡夫の心」が無助詞である。

(10) 玉鬘^{たまのづ}の御事〔 〕、えしえたまはぬ〔 〕、むげに心おくれたる。(二四〔源氏物語—男の論〕二一〇③～④)

兵部卿宮^{ひょうぶきやうのみや}の、玉鬘との関係は、ついにものになさることので

きなかつたことが何とも意気地ない感じだ、と読み取れて、その対象語は準体法語句である。また、「心おくる」は、存続の助動詞「たり」を用いて、形容詞に相当する述語となっている。総主語も対象語も無助詞である。

(11) 『朝顔』〔 〕、紫の上^{むらさきのうへ}のものを思へるが^がいとほしきなり。(九〔源氏物語—卷々の論〕一九一②～③)

『朝顔』の巻は紫の上が物思いをしているところがかわいそうである、と読み取れて、準体法語句の対象語が対象格を示すガを伴っている。

(12) 『賢木』〔 〕、伊勢の御出^いで立ちのほども艶^{まか}にいみじ。(九〔源氏物語—卷々の論〕一九〇⑤)

『賢木』の巻は六条御息所の伊勢へのご出発のあたりもあてやかですてきだ、と読み取れて、総主語相当語句に続く対象語はモを伴っている。他にも、「艶にいみじ」と思う対象語が存在することを仄めかしているのであろうか。

(13) また、『露つゆの宿やどり』〔 〕、古物語の中には、言葉遣ことばづかひ、歌などなどもも、いと悪あしくもなし。(四〇〔露の宿り〕二五二⑧⑨)

『露の宿り』という作品は古物語のなかでは言葉遣いや歌などもそれほど悪くもない、と読み取れて、「いと悪しくもなし」と思える対象語が他にもあるということであろう。

次の(14)・(15)は、ある女房が定子皇后宮と彰子上東門院とで、どちらがよりすばらしくいらつしたかと問うた際、別のある女房が答えた一文と続く一文とである。

(14)・(15) 「皇后宮〔 〕、御みめもうつくしうおはしませしけるとこそ。院も、いと御志〔 〕深くおはしませしける。(六〇〔女の論—皇后宮(定子)〕二七八⑧⑨)

(14)文は、皇后宮のほうが、他にも美しいところがおありだが、ご容貌も美しくいらつしたと、と読み取れる。(15)文は、皇后宮もそうでいらつしたるように、一条天皇もたいへんご愛情が深くていらつしたと、と読み取ることができる。(14)文の総主語相当語句は、選択した一方を取り立てて他方と区別している。それに対して、(15)文の総主語相当語句は、(14)文の総主語相

当語句と類似する関係にあることを示そうとしてその末尾に「を添えている。ここで注目したいのは、述語「深くおはしませしける」の対象語「御志」の上に連用修飾語として機能するはずの副詞「いと」が存在することである。

(16) 『帚木はきぎ』の雨夜の品定め〔 〕、いと見どころ〔 〕多くはべるめり。(九〔源氏物語—卷々の論〕一九〇①②)

『帚木』の巻の雨夜の品定め部分はたいへん見どころが多いようです、と読み取れて、その「いと」が対象語「見どころ」の上にあるが、その「いと」は、対象語「見どころ」と述語「多くはべるめり」が「概念化した「見どころ多くはべるめり」を修飾していると見なければならなかったものと見えてくる。そう見たとき、(15)文の「いと」も、対象語と述語とを「概念化させた」「御志深くおはしませしける」を修飾していたことに気づかされることになる。用例(15)・(16)のコソなし総主形容詞文の観察からたまたま得た、小さな発見である。ただ、筆者が、ここで初めてこのような事実に気づいたわけではない。それまでに、同趣の用例に幾例か出会って、認識している。今回の『無名草子』の用例としては、用例(15)・(16)で、その該当例を初めて見た

ということである。

六 総主語の発生・成立の背景

「象は鼻が長い。」などの、いわゆる総主文は、どのような背景あつて生成するのであろうか。象についてあれこれ述べているなかであつたら、その目とか耳とか、足とか尻尾とかいう、あれこれの一つとして、「鼻が長い。」というだけであらう。それに対して、猿や熊と比べて、どこがどうであるかをいおうとしたから、「象は鼻が長い。」という一文が登場してくるようになるのであらう。

『無名草子』の「(三九)」には、『末葉の露』という散逸物語についての批評が展開されている。言葉遣いは平凡だといったうえで、皇太后宮を始めとして源中将や宰相中将の行動や性格などについて論じている。さらに、右大將が亡くなった折の随身の服装についての驚きや、その他の好悪・優劣の印象が述べられている。そのなかに、次の一段落も存在する。

○ また、をかしきこともあんめり。有智^{うち}の得業^{とくごふ}が酔^よひ狂^{くる}ひなどもをかし。さても思ひ出^いでななき宰相^{さいしやう}中将、たち返りては

かりめでたき。(二五二②～④)

その第二文は、優れたお坊さんの酔っぱらいぶりなどもおもしろい、といっているものと読み取れる。その一文を、表現の場面を違えて紹介するとしたら、A文のようになるであらう。

A 『末葉の露』は、有智の得業が酔ひ狂ひなどもをかし。

総主語発生の背景が、ここに見えてくるのである。小稿の用例(2)・(3)・(9)・(11)・(12)などには、その総主語の発生・成立の過程が見えてくるのである。

用例(13)には、総主語のない一文が続いている。以下に、その用例(13)と続く一文とから成る一段落を引いてみることにする。

○ また、『露の宿り』、古物語の中には、言葉遣ひ、歌なども、いと悪しくもなし。あまりに人の失せたるほどぞまがまがしき。(二五二⑧～⑩)

その第一文は、現に用例(13)として見てきているように総主形容詞文である。いま、その第二文を、表現の場面を違えて紹介

する必要が生じたとしたら、それは、おのずからB文のようになるであろう。

B 『露の宿り』は、あまりに人の失せたるほど（ま）まがまがしき。

『露の宿り』はあまりにも人が亡くなってしまったあたりが縁起が悪い、と読み取れる総主形容詞文である。

次のC文は、『無名草子』には存在しない総主形容詞文である。『無名草子』（四二）は『宇治の川波』という作品についての批評が語られていて、二五三ページ12行めから二五四ページ11行めまでにわたっている。その二五四ページ4行めからの一段落の冒頭にあるその一文は、その一文だけでは何について論じているか、前段落を知らない読者には見えてこない。通釈を施す、その講読に際しては、そこに総主語が補われることになる。それが、C文である。補われた文の成分なので、「」を付しておく。

C また、『宇治の川波』は、前さい斎宮の、むげにし出いだしたること（二五四④）も果てたる（二五四⑤）で、さうさうしき。

『宇治の川波』は前斎宮がまったく何一つすることもなくて終わってしまったことが物足りないことだ、と読み取れる総主形容詞文である。多くの講読授業では、そのように読解されているはずである。^①

「象は鼻が長い。」文は、動物園を楽しむ年齢層がおのずから言ってしまう一文である。小学生となると、作文の苦手な児童でも次の程度にはノートするであろう。

○ 象は身体が大きい。耳が大きくて、首が短い。鼻が長い。牙きばも生えている。

その第三文「鼻が長い。」文は、第一文の総主語「象は」を受けているものと読み取れよう。したがって、その第三文だけを認識しようとする、おのずから総主形容詞文の「象は鼻が長い。」文となっていることになるのである。

ただ、文型は一旦定着を見せると、その文型が自然と踏襲される。背景がなくても、「猿は尻が赤い。」と言ってしまったのである。二つの主語があっても、抵抗感がない。「世は、さだめなきこそいみじけれ。」（徒然・七）など、快くそう言える口調となっている。

付 総主語の多くが総対象語、いや対象語だった

小稿の用例(15)・(16)からは、そこで述語とした形容詞の対象語が存在しないことになる。そこで対象語としていた名詞「御志」や「見どころ」は、述語の一部分でしかないものと見えてくる。それぞれの述語は、「御志深くおはしました」と「見どころ多くはべるめり」とである。それぞれの連用修飾語としての副詞「いと」は、「御志深し」や「見どころ多し」という複合形容詞を修飾していたのである。

「象は鼻が長い。」文にあっても、「鼻が長い」は、漠然と一概念化させて受けとめられていた⁽¹²⁾のである。ただ、単語を形態として捉える意識が強くて高い吾人は、その「鼻が長い」に改めて注目したときには、長く主語「鼻が」と述語「長い」として受けとめ、ある時期からは、対象語「鼻が」と述語「長い」として受けとめているのである。小稿の用例(15)・(16)は、その「象は鼻が長い。」文が、次のようにも表現されることを教えてくれた。D 文である。

D 象はたいへん鼻が長い。

その副詞「たいへん」は、「鼻が」を修飾していないだけでなく、「長い」だけを修飾しているのでもない。「鼻が長い」を修飾しているのである。「鼻が長い」は、その瞬間、一概念の形容詞として機能しており、総主語「象は」は総対象語、いや対象語となっていたのである。念のため、図解しておこう。

D' 象は たいへん 鼻が長い。

平生は、品詞論を尊重した構文論に従って読解に当たりたい。橋本文節文論に倣って、「たいへん」は「長い」を修飾していると多くが見てもいた⁽¹³⁾。ただ、時に、吾人は、その用例に即した読解をしていかなければならないようである。右の図解をもって、筆者は、その「たいへん」が「鼻が長い」を修飾しているとも表明しておこうと思う。

(注)

(1) 「帝国文学(五卷五号)」(帝国文学会・明治三十二年)に載る草野清民「国語ノ特有セル語法―総主」の冒頭に掲げている訴えで、その前年の「帝国文学」に述べた趣旨である。なお、その本文は(注3)に紹介する『日本の言語学(第三巻 文法I)』に拠って確認した。

(2) 三上章は「国語学(八)」(国語学会・昭和二十七年)誌上に「主格・主語・主語」を発表、続いて「現代語法序説」(刀江書院・昭和二十七年)においても、その「象は鼻が長い」文の二つの主語に注目させ、その三年後には、「国語学辞典」(国語学会編・東京堂出版・昭和三十年)において、「主語」「述語」などの項の執筆を担当している。さらに、その六年後には、その一文を書名にした「象は鼻が長い」(くろしお出版・昭和三十六年)を刊行している。

(3) 『日本の言語学(第三巻 文法Ⅰ)』(大修館書店・一九七八(昭和五十三年)の(総主・提題・「は」と「が」)には、草野清民を始め、併せて九編の論考が集録されているが、そこに三上章の論考を見ることはない。服部四郎・大野晋・阪倉篤義・松村明編となっているが、この巻の実質的な担当が大野晋であるかに見えてくる編集である。

(4) 小田勝『実例詳解古典文法総覧』(和泉書院・二〇一五(平成二十七年)／四二七～四二八ページ)に現代語文「象は鼻が長い」に続けて古典語文九文の総主文が紹介されている。そのうちの「古今和歌集」に見る「山里は秋こそことわびしけれ」(二二四)と同じ文型で語る女房たちが『無名草子』にいたのである。

(5) 碁石雅利との拙共著「古典文の構造」(石文書院・平成六年)／六七～六九ページに、aとして助詞「も」による主題部の各用例を紹介している。如何に、小稿という総主形容詞文に相当するものを引いておく。

○除目の頃など□、内裏わたり□、いとをかし。(枕・三)

○大路のさま□、松立てわたして、はなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。(徒然・一九)

○鳥は□ 異所のものなれど、鸚鵡□いとあはれなり。(枕・四一)

○人は、かたち・ありさまのすぐれたらんこそ、あらまほしかるべけれ。(徒然・二)

○鶯は、九重の内に鳴かぬぞいとわろき。(枕・四一)

○手慣れし具足なども、心もなくて変はらず久しき□、いと悲し。(徒然・二九)

○万の事も、始め終はりこそをかしけれ。(徒然・一三七)

(6) 時枝誠記『国語学原論』(岩波書店・昭和十六年)第二篇「各論」第三章「文法論」四「文の成立条件」二「文における格」(一)「主語格と対象格」(三七三ページ以降)において、対象語と呼んでいる。

(7) 拙稿「『無名草子』コソ係結文の文構造―主部のいろいろに付くコソと結び述部のいろいろ―」(『国語研究』(國學院大學国語研究会)第八号令和五年二月)の第一章に検出した用例群が「涙こそ、いとあはれなるものにははべれ」(五「捨てがたきふし涙」一八四⑮)一八五⑰などの提題注語に付いたコソ係結名詞文であり、第二章に検出した用例群が「国基と申す歌詠みこそ、我が歌は、万葉集をもてかか所にする」と申しけれ」(四八「撰集」二五九⑧)⑨などの動作主主格に付くコソ係結動詞文である。なお、小稿における『無名草子』の諸実態に関する記事は、この拙稿に拠っている。

(8) 文部省「中等文法 口語」(中等学校教科書株式会社・昭和二十二年)／文部省「中等文法 文語」(同上)を併せて、そこに見る姿勢の一つをここに紹介したつもりである。それは、その後の学校文法にも引

き継がれていると思いたい。

- (9) 『折口信夫全集(第十九卷)』(中央公論社・昭和三十年)の冒頭に載る一編としての「わかしとおゆと」で、國學院大學「同窓会雑誌」(明治四十一年)に発表された論文である。また、同全集同巻には「形容詞の論」語尾「し」の発生―(金沢博士還暦記念「東洋語学」の研究・昭和七年)も収録されている。

- (10) 『岩波日本語 文法 I』(一九七六(昭和五十一年)の5「用言」(川端善明)は、その用言を―「述語であることについて」「形容詞について―述定述語としての」「三「形容詞について―装定述語としての」「四「動詞について」として論じている。小稿にいう総主形容詞文の形容詞は、述定述語としての形容詞である。

- (11) 『注5』にも引いた拙共著『古典文の構造』の該章の諸項の脚注欄には、「主題部の支配力」として以下のような解説を施してある。

鶯は、文などにもめでたきものに作り、声よりはじめて、さまざまも、さばかりあてにうつくしきほどよりは、九重の内に鳴かぬぞいとわろき。

右の傍線部「作り」「あてにうつくしき」「鳴かぬ」は、全て主題部「鶯は」についての動作・状態である。つまり、主題部は、文末までその内容に沿って述べられることを要求するほどの支配力を持つ。

さらに、主題部は、一文の主題を表すだけでなく、文章全体の中心課題として提示される場合が多い。右の文に続いてさらに以下のように展開する。

人の「さなむある。」と言ひしを、さもあらじと思ひしに、十年ばかりさぶらひて聞きしに、「鶯ハ」まことにさらに音せざりき。さるは、「鶯ハ」竹近き紅梅も、いとよくかよひぬべきたよりなりかし。「鶯ハ」まかでて聞けば、あやしき家の見どころもなき梅の

本などにはかしがましきまでぞ鳴く。(鶯ハ)夜鳴かぬもいきたなき心地すれども、今はいかがせむ。(枕・四一)

冒頭の文に提示された「鶯は」は、句点を越えて以下の文章全体を支配している。つまり、以下の文章は「鶯は」という論題に應ずる叙述内容に限られているのである。

- (12) 小稿の第六章「総主語の発生・成立の背景」のC文は、右読解の要領に倣ったものである。総主語は、そのように想定されて読解されている。なお「象は鼻が長い」文の「鼻が長い」について、これを一般念の形容詞と見る捉え方と同趣の判断は、北原保雄「日本語文法の焦点」(教育出版・一九八四(昭和五十九)年)にも見られたところであり、いっそう古く、松下大三郎『改撰標準日本文法』(紀元社・昭和三年)にも見るところである。

北原保雄は、同書の「全体補充と部分補充」の「二重主格はどうして可能か」(二〇八ページ以降)において、「象は鼻が長い」「彼女は色が黒い」文を「象が長鼻だ」「彼女が色黒だ」文に言い換えて、二重主格が可能である理由を説明している。松下大三郎は、同書の第六編「詞の相関論」第二章第一節「主語と叙述語」の二(六三〇ページ以降)において、「松の木、枝」折れたり。「日本、人口」増加す」「老人、耳」遠し。「此の子、靴」破れたり。」文の二重傍線部について、「は既に主体」「を」含んであるが長い叙述語となつて別に―なる主語を求めることになる。」と述べている。

- (13) 橋本文節文法といつても、橋本進吉『国語法研究』(橋本進吉博士著作集2・岩波書店・昭和二十三年)『国文法体系論』(『同著作集7』岩波書店・昭和三十四年)に拠つてよりも、文部省『中等文法 文語』の十六「文節と文節との関係」・十七「文の構造」に取り上げられた用例と解説とに拠つて、その『中等文法』の取り扱ひのままとどまる取り扱ひと連文節の考え方を採り入れて発展させた取り扱ひとが並

行していた昭和四十年代から三十年ほどの間の中学校検定教科書の文構造の図解法などを指していたものと受けとめていただきたい。この「象はたいへん鼻が長い。」文の文構造の図解について大きく捉えていうと、次の二とおりの説明がなされていたように思い出される。

α 象は「たいへん」鼻が「長い。」『中等文法』の取り扱いに倣った図解)



β 象は「たいへん」鼻が「長い。」(連文節の考え方を導入した図解)

その α と β とは、「たいへん」の修飾語としての機能についての理解が異なることになる。遠い昔、そう感じた日があった。

そう感じた日を、いま敢えていえば、昭和四十九年以前ということになる。文部省検定教科書・学校図書『中学校国語』の文の成分の取り扱いに倣うと、次のように図解されることになるからである。

γ 象は「たいへん」鼻が「長い。」

(学校図書『中学校国語』文の成分の取り扱いに倣った図解)
そこでは、文の成分を部と呼んだ。「象は」が主部、「たいへん」が修飾部、「鼻が長い」は述部として取り扱ったはずである。そこで、その修飾部「たいへん」を取り除くと、その文は、次のように読めてくるのである。

δ 象は「鼻が長い」

(小稿付章において究極的に表明しようとする図解)
そこという文の成分は、一文を読解した結果の意味のまとまりであ

る。そこに「？」とした？は、単語や文節についての意識の強い方々への配慮から、せめてそうでもしないではいられなくなった結果の表明である。

昭和四十九年度版から編集委員としてお手伝いをさせていただいてきた学校図書『中学校国語』も、令和三年度版をもって廃刊となった。「いま、文の成分はどう捉えられているか―中学校教科書の「―語」と「―部」となど―」(上)(下)〔「國學院雑誌」第一〇〇巻第一〇・二二号、一九九九年一〇・二月／拙著『文構造の観察と読解』(新典社・令和4年9月刊)に、IV学校文法の文の成分「I」検定教科書の文の成分として収録〕において各社の図解を比較整理した日から二十数年が経過した。